

長かった梅雨が明けようとしていた。その日ミチは、北国街道、妙高の高原を野尻に向かつていた。初夏の陽射しは強く、葉先に踊る陽の光が目痛かった。

手をかざさなければ遠くを見通すことが出来ないほど、高原に溢れた光は白く眩しく輝いていた。

やがて、道の先にうずくまる二つの人影が見えて来た。近づいてみると、武家の子女らしい二人連れが、切れたワラジの紐を繋ぎかえようと苦心をしているところだった。

紐は根元から切れて、もはや繋ぎかえることは出来そうにない。ミチが手持ちの予備を渡して立ち去ろうとしたところ、自分達も野尻まで行くので同行させてくれ、と言う。

二人は母娘だった。理不尽な刀に命を奪われた夫の仇を求めて上田に行く途中だと言った。

庄内藩の普請組で不正があり、その不正に気付いた夫が、不正を働いていた同僚に斬られたのだ。

夫を斬った同僚は不正の罪を夫に着せ、正義を行った善良な家臣を装って口を拭っていたが、ほどなく真偽が明るみに出そうになった時に出奔した。

母娘は藩に敵討ちの願いを出し、上田に潜んでいるらしい、という噂を頼りに仇討の旅に出たのだった。

女二人だけで助勢も無しに敵討ちとは余りにも無謀。ミチ

は野尻までの道中、懸命に思い留まるよう説得を続けた。

「仇討ちなどを行えば、またどちらかの命を失うことになります。人が人の命を奪って良いわけがありません。例え敵討ちが成功したとしても、とどめを刺す時、あなた方はそのことに耐えられますか？最後の一刺しの手に残る感触と血の臭い、断末魔の形相が一生あなたに付いて回るのですよ。しくじればあなたもあなたの娘さんの命も無くなります。そのような無意味な代償を払う必要が本当に有るのでしょいか？」

「その通りかもしれませんが、無残に殺された夫の恨みも晴らさずのんびりと生きて行くことなど、とても私達には出来ないのです。何としても私達の手で夫の無念を晴らすつもりです。それは娘も承知のことです」

「私も母と同じ思いです。一太刀でもあびせ、父の無念を晴らさない内は、生きていく甲斐の無いもの。二人でかかれば必ずや本懐は遂げられると思っています」

「藩は二人だけの敵討ちを許したのですか。手に余ることを承知の上ですか？」

「むしろ、見上げた心がけだ、とお褒めの言葉とご褒美を頂戴したほどです。それに、首尾よく仇が討てれば上々、例え返り討ちに遭ったとしても、武士の妻子として避けて通ることの出来ない道なのです」

ミチは当惑した。ミチの父親も武士である。しかし、父親

の話にも周辺の出来事の中にも、このように命を賭して事に臨む厳しい状況は今までに経験が無かった。武士の世界とはこれほどまでに窮屈なものだったのか。

仏門に身を置く者として、言葉を尽し命の意味を伝えたいと思った。だけど、懸命に説得をしようとしても、僅か三十年を生きただけのミチには、永い歴史の中で醸成され固まつてしまった価値観を、にわかには覆す力は無かったのである。むざむざ死にいくような敵討ちなど、何としても思い留まつて欲しかった。

萩で世話になった聞心院老師や美濃の傘狂の言葉の中に、何とか説得の糸口をみつけようとした。終いには懇願にも似た気持ちで二人を説き伏せようとしたが、二人の母娘にその思いは届かなかった。

翌朝、新井の俳人からの頼まれ物があったミチは、柏原で二人と別れなければならなかった。

二人にしがみ付いてでも思い直してほしいと思つたが、無駄であることも判っていた。

別れ際に、紙に南無阿弥陀仏と書いて渡し、どのような結果になったとしても、仏はあなた方に寄り添っていらっしやいます、と言葉を添えて二人と別れた。

仇に巡り合いさえしなければ、母娘の命は永らえることができる。

遠ざかる二人の背中を見送りながら、ずっと仇に巡り合わ

ないで欲しい、と念じた。

仇討の母娘の噂を耳にしたのは、ミチが柏原から善光寺に参り、姨捨まで伸ばした足を引き返して再び善光寺を訪れた時だった。

参道に曲がる辻で、越中の薬売りが数人を前に身振りも派手に何やら話をしている。その脇を通り過ぎようとしたミチは「母親も娘も・」という言葉聞きとがめて足を止めた。もしや仇討の母娘の話ではあるまいか。

薬売りは商売をそつちのけで、まるで現在進行中の敵討ちの現場を伝えているように、講釈師顔負けの話し振りだった。ミチの心臓が激しく鼓動を打った。

「大きな木を背にして抜刀した男の両脇から、懐剣を逆手に握った母娘が同時に男を目がけて突き進んだ。だが、寸前のところで身体を交わした男は、先ず母親の肩口に一撃を加え、返す刀で娘の胸を払った。一瞬足が止まった母娘だったが傷口からしたたる血を物ともせず、今度は男の正面から二人揃って大きな気合いと共に突進した。

その勢いに恐れをなした男は、むやみに刀を振り回しながら後じさりをした。

その切っ先が二人の顔面を割き、鉢巻が千切れ飛ぶと、綺麗に結び付けられていた髪が崩れて母娘は鬼の形相に変わった。

その姿は、とてもこの世の物とは思えない妖怪の化身を思わせる物凄さだった。

噴き出す血に染まった顔に黒髪が被さり、切り裂かれた着物からは、ざっくりと割れ血にそまった母親の肩が見えている。

娘の着物に既に帯は無く、露わになった太ももを伝って滝のように血が流れ続けていた。

それでも二人は男に向かって懐剣を突きたてようと、うめき声とも叫び声ともつかぬ獣の唸り声をあげ、よろよろと這うように男に向かって行った。

余りに凄惨な姿に恐れをなしたのは男のほうだ。おまけに、それまで息を殺して遠巻きに成り行きを見守っていた人足達が、次々に河原の石を掴んでは男に向かって投げつけ始めたからたまらない。

男は止めを刺すどころか、後も見ずに逃げ出してしまった。追いつがる母娘は、やがて二人が抱き合うとそのまま崩れ落ち、息絶えてしまった。二人の身体から流れ出た血はまるで川のように。

血の海に横たわったまま動かなくなった二人の骸に、折から強くなった雨脚が音をたてて降りしきった

「助勢する者はいなかったのですか？」ミチが思わず声をかけると、それだよ、と言っておいて薬売りは話を続けた。

「男は、元は庄内藩の侍だということだった。人足に紛れ

て千曲川改修のモッコを担いでいたらしい。浪人が力仕事をすることは珍しいことではないので、普段だと誰も気にも留めないのだが、この男、ひどい庄内訛りがあった。庄内から逃げた男を探していると言えばたちまち知れてしまったってわけだ。

おまけにその日に限って現場の役人達は城内に全員呼び戻されていて、いつも威張り腐っている監督一人だけが残っていたのだが、こいつが全くのはったり野郎だった。

二本差しで侍の姿をしてはいるものの、蚤の心臓しか持ち合わせていなかったなあ。立会人を頼まれただけで真つ青になつてしまい、人足達を怒鳴り散らしているいつもの景気は何処へやら、ガタガタ震え出してしまつて立会いはおろか助勢など飛んでもない話しさ。

それにしてもだ、この母娘、懐剣と一緒に南無阿弥陀仏と書いた紙を一緒に握っていたつて言うから痛ましいじゃないか。はなつから死ぬ覚悟で仇に向かっていったつてことだ。いい覚悟だとは思わないかい。それに引き替え情けないのが監督だ。侍の風上にも置けねえや。だろ？」

「それはいつのことだったのでしょうか？」

「えーと、三日前に上田で聞いた時に、二日前の出来事だと言つてたな」

そうすると、ミチが姨捨の山頂で難儀をし、傳五郎夫婦に助けられた日に違いない。薬売りの話を聞いたミチの胸の中

を深い悔恨が攻め上がり、息が詰まって立っていることが辛くなつた。

顔色を失つて茫然と佇むミチに薬売りがかけた言葉が、ミチの頭の中に遠いこだまのよう響いていた。

「尼さんどうかしたかね？ 気付けならいい薬を持っていますよ」